

若年女性の妊娠と出産の実態
— 10代で妊娠・出産した女性たちの語りから —

The real situation of pregnancy and childbirth in young women
Narrative analysis of women who experienced pregnancy and childbirth in their teens

石田奈那

北見赤十字病院 医療社会事業部医療相談室

吉中 季子

神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部社会福祉学科

小野川文子

名寄市立大学保健福祉学部社会福祉学科

【要約】10代女性の妊娠・出産は、学業中断、経済不安や社会的孤立などが問題点となる
ことが多く、社会から否定的に捉えられ、その存在自体が偏見の対象となっている。
本研究では、5人の若年母親の語りから、妊娠までの決意、学業への思いをとらえ、現代
の10代で妊娠・出産を経験するまでの葛藤の実態を明らかにした。

Key Words : 若年妊娠・若年出産・10代

1. はじめに

日本の子どもをめぐる状況が1990年代後半に少子化問題・児童虐待・育児不安などがクローズアップされて以降、子育ての負担を軽減するための様々な支援が展開されてきた。2015年からは子ども・子育て支援法も施行され、社会全体で子育てを支えていこうとする施策が進められる一方で、子どもを産み育てるということに否定的でスティグマが付きまとうことがある。それは10代で妊娠・出産を経験した女性、いわゆる「若年母親」に対してである。

一般的に10代は、勉学や部活動に励み、その後社会で自立していくうえで必要な知識や経験を得る過程の時期である。そのため、10代で親になることは「親になる準備が不十分で、育児力が乏しく、学業中断、経済不安や社会的孤立などが問題点となることが多い」と指摘される(奥田・中井,2008)。さらに、この世代の出産は「若すぎる」「未婚である」「勉学中の身である」「親としての自覚が未熟である」「経済的に自立していない」等といった見方がなされ(林,1987 森田,2004)、子どもを産み、人の親になるということ自体が、社会から容認されにくく、同時にその存在は偏見の対象ともなりうる(大川,2004)。また、若年で母親になることは、その後の生活も社会的な困難を抱えることも少なくなく、貧困の問題と結びつきやすい。

日本においては、望まない妊娠の「予防」に対する取り組みは徐々に広がってはいるが、10代の出産という個人への支援はほとんど行われていない(大川,2010)。若年妊娠者を取り巻く状況は、「学業継続の困難さや相談機関の少なさとその活用不足が明らか」であり、「若年妊娠に接する機会の多い医療機関や保健所では、手探りの状況で支援を行っている」(小川・安達・恵美須,2007)。さらに、若年妊娠・出産を、一般母子保健施策の枠組みにあてはめたとしても、10代であるがゆえの学業継続の困難さや経済的不安、社会的孤立など様々な問題に対処することは難しいことは容易に推測できる。

本稿の問題意識は、「予防」に重きが置かれた施策だけでなく、芽生えた命を守る支援を検討する必要があるのではないかと、という点からはじまる。そのためにはまず10代という若年層特有の置かれた状況や実態を把握することが求められる。そこで本研究は、妊娠から出産に至るまでの実態を把握すること、とりわけ、妊娠判明時の出産か中絶か、学業の継続か中断かといった、様々な不安や問題を抱えるとされる時期に何が必要かを考えるための一助となりうることをしたい。

本稿では、10代で妊娠、出産を経験した者、そして20歳以下で母親となった女性を「若年母親」と呼ぶことにする。また、妊娠時に学業中(高校生・専門学校生)であった女性を対象とする。なお、本研究の方法は、若年妊娠、出産者へのインタビュー等による質的調査である。

2. 若年妊娠・出産の現状

(1) 若年妊娠・出産の現状

10代の妊娠者が注目されるようになったのは、1990年代後半から中絶率が増加したことからである。中絶は「誰しものが経験する恐れのあるもの」として、日本にモラル・パニックを引き起こした(大川,2008A)。当時は携帯電話が普及し、女子高生に対し「10代の性の乱れを批判する声が高まり、これまでごく少数の特殊な存在であった10代の母親は、性の乱

れの結果として捉えられるようになり、『予防』しなければならない存在という見方が強まった(大川,2008A)と同時に、「女子高生の性の商品化」とまで言われた(種部,2016)。

そうした「予防」が影響したのか、10代女性の出産は、2002年の21,401人をピークに、2015年には11,927人となり減少傾向にある。全世代の出産数に占める10代の出産数割合も、2002年の1.85%から2015年の1.19%まで年々低下し、10代の出産者はより少数派の存在となった(厚生労働省の『人口動態統計』¹⁾。また、10代の人工妊娠中絶(以下、中絶)件数は2001年に46,511件とピークに達し、その後、2014年には17,854件と減少傾向となっている²⁾。

ここで、10代の女性が、妊娠がわかってから出産までたどり着く割合をみてみよう(図1)³⁾。10代の妊娠総数(中絶+出産数)は、2001年の67,476人をピークに年々減少している一方で、出産割合は2012年以降徐々に増加傾向にある(2014年:42.2%)。すなわち、妊娠総数は年々減少傾向となるが、妊娠をしたら出産をしようとする割合は高まってきている。

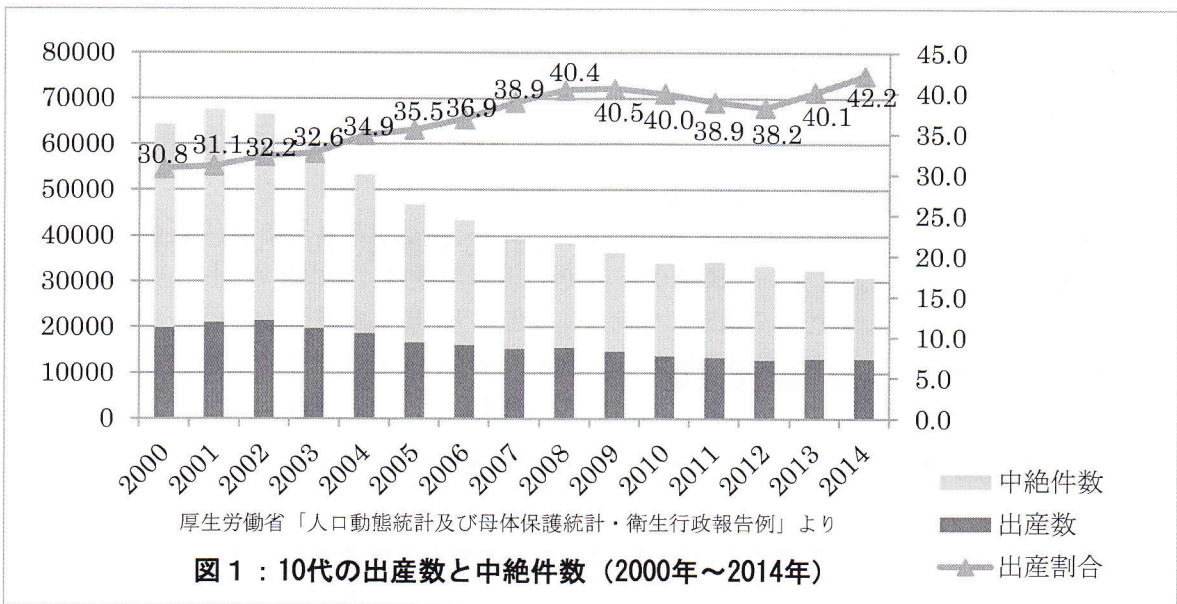


図1：10代の出産数と中絶件数（2000年～2014年）

また、10代の婚姻は、婚姻時期が嫡出第一子の妊娠時期よりも遅い、いわゆる「できちゃった結婚」が約8割を占める(森田,2012)⁴⁾。さらに10代の結婚は離婚率も高いことがわかっている(厚生労働省『離婚に関する統計の概況(平成21年度)』)。この10代女性の離婚率の高さは、将来の見通しを立てて結婚するかどうかを検討するというより、世間体や経済的負担の軽減のために、「10代女性が妊娠・出産・子育てを自分のライフプランに位置づける前に、妊娠したから結婚するという状況に追い込まれる」(森田,2012)と推測できる。

(2) 先行研究からみる若年出産の不安定さ

若年母親に関する関心と研究はどこに視点が置かれていたのだろうか。2000年頃までの先行研究では、10代の妊娠に対して「中絶防止」を中心に視点が置かれたものが多く、そこには、経済的負担や教育を優先とする考え方が、妊娠の継続を困難にするとの見方が中心

であった(小川・安達・恵美須,2007)。2000年以降になると、その実態を探るための「若年妊娠」「若年出産」対象の調査が行われるようになった(東京都社会福祉協議会「10代で出産した母親の子育てと子育て支援に関する調査,2003年など)。

また、10代母親に対する「偏見の払拭」(森田,2004)や、妊娠継続やその決断に関わる相談機関の設置や、相談体制の強化などの課題の示唆と、若年母親の実態把握の先行研究もみられはじめた(野末,2000;小笠原・利部,2003;小川等,2006)。それらからは、10代の出産に関し、経済的基盤の不安定さや社会的孤立、またパートナーが若年であることも多く、妊娠継続や養育に関する問題(奥田等,2008;リウ,1998;森田,2004)、あるいは、「予定外の妊娠に対する動揺、妊娠に対する知識不足、家庭環境または社会環境からの協力が十分得られていない」こと(森田,2012)、さらに「自分の妊娠についてだれかに相談することへの躊躇の他、経済的な理由、妊娠や分娩に対する知識不足から妊婦健診の意義を軽視する傾向」といった、妊娠を準備する体制が不安定、あるいは相談者の不在による情報不足が指摘されている(月刊地域保健,2015)。

そのような本人の情報や環境面での不安定さにより、①妊娠健診の未受診や受診時期の遅れ、②飛び込み分娩(妊娠健診受診が0~2回もしくは陣痛諸頼などで来院し分娩となるもの)、③それによる周産期予後の高いリスク(森田,2012;地域保健,2015)などの、出産そのものへのリスクが高まることも指摘されている。

3. 若年妊娠、出産者へのインタビュー等調査

以上のような問題意識から、10代で妊娠、出産を経験し、20歳以下で母親となった女性5人にインタビューを行った。

(1) 調査の目的・方法・倫理的配慮

調査対象者は、現在20・30代で、10代で妊娠と出産を経験した者5人である⁵。対象者には本研究の目的や方法を説明し、同意を得られた母親に対して、2016年3月~8月に実施した。

本研究では、2つの調査方法を用いている。5人の調査対象者のうち3人は面接でのインタビュー調査で、半構造化面接法にて実施した⁶。他2人は子育てや仕事の都合上、まとまった面接時間の確保が困難であるという理由から、無料通話アプリケーション「LINE」でのチャット方式によるインタビュー(メール)を実施した。SNSを通してのやり取りには不確かさがあることも否めないが、子育て中の母親の日常の多忙さの事情を考慮するためと、対面式にはないSNS特有の表現の容易さを鑑みて、この方法を採用した⁷。

インタビュー等の内容は、主に妊娠、出産における当事者の思い、当時の相談者、家族やパートナー、友人等の周囲、とりわけ学校の対応、出産を決意するまでの葛藤などを尋ねている。

倫理的配慮については、個人を特定されることがないように事前に文書と口頭にて説明し、不利益が生じないこと、回答は任意であることも加えて説明した。

インタビューの結果は、まず5人の女性たちの出産に至るヒストリーを簡単に概観する。その後、それぞれの転機となった場面や、その時の思いについて、個々に取り上げて検討する。調査対象者の基本的属性、パートナー、家族構成の概要などは表1に示す。

表1：調査対象者の基本的情報

対象者(年齢)	A (22歳)	B (22歳)	C (22歳)	D (31歳)	E (38歳)
パートナー 対象者からみた関係(年齢)	他校の同級生(21)	1学年上の先輩(23)	(21)	同級生(31)	社会人(38)
学歴 職業	高校卒業 福祉施設就職	高校卒業 大学進学	アルバイトから 正社員へ	高校卒業 準公務員	高校中退 肉体労働
妊娠時期(年齢)	高校3年生の冬(18)	高校2年生の冬(17)	専門学生(19) 中絶 2度目(20)	高校3年生の冬(18)	高校3年生の冬(18)
学歴	高校中退	高校中退	専門学校中退	高校卒業	高校卒業
婚姻関係	結婚→離婚	未婚 (交際解消)	結婚	結婚	結婚→離婚→再婚
現在の家族構成 (うち同居)	<ul style="list-style-type: none"> 〈定位家族〉 ・母(50) ・伯父 〈生殖家族〉 ・長女(3) 	<ul style="list-style-type: none"> 〈定位家族〉 ・父(47) ・母(45) ・弟(20) 〈生殖家族〉 ・長女(3) 	<ul style="list-style-type: none"> 〈定位家族〉 ・父(54) ・母(53) 〈生殖家族〉 ・夫(21) ・児(6か月) 	<ul style="list-style-type: none"> 〈定位家族〉 ・祖母、祖父 ・父(50) ・母(50) ・兄 〈生殖家族〉 ・夫(31) ・長男(13) ・次男(10) 	<ul style="list-style-type: none"> 〈定位家族〉 ・父(70) ・母(69) ・兄(42) 〈生殖家族〉 ・長男(20) ・長女(17) ・夫(再婚)(37) ・次男(1) (妊娠10ヶ月)
方法	面接	「LINE」	「LINE」	面接	面接

※対象(年齢)内の年齢はインタビュー時の年齢とする。

(2) 女性たちのライフヒストリー — 10代の出産

① Aさん—18歳で出産、母親に反対、DVによる離婚

パートナーは他校の同級生でSNSを通して出会い、交際7か月で、Aが高校3年のときに妊娠した。妊娠のことを実母に打ち明けるものの出産を反対された。一方、パートナーの両親は、出産に対して協力的だった。実母からは反対されたため、連絡を断ち、出産までパートナーの実家で暮らした。高校の先生は中退を引き留めたが、結局中退した。Aはパートナーと結婚し、出産後も継続してパートナーの実家(2階を間借り)で暮らしていた。パートナーは高校卒業後、福祉系の仕事に就いた。Aは子どもが2歳になってパート勤務にでた。そのころ同居している義親の目の届かないところで、Aと当時2歳の娘に対して、暴力(DV)を振るうようになった。一度、パートナーの母親に相談したが「全然気付かなかった」と言われた。Aは、パートナーが怒る原因は自分にあると感じるものの、離婚を決意する。Aと子どもは実母の家で伯父とともに暮らしている。

② Bさん—17歳で出産、シングルマザー

Bは高校2年生の冬休みに妊娠に気づく。パートナーは1つ上の先輩(高校3年生)で進学先も決まっていたため、Bの妊娠により大学進学を辞めてほしくないと思った。実母に打ち明けると、子育ての大変さを強く言われたが、反対は一切されず家族でサポートすると言ってくれた。Bとパートナーは話し合い、まずは実家のサポートで子育てし「結婚も急がず、相手が大学を卒業してから」という話だったが、その直後からのパートナーの中途半端な発言に失望し、Bより交際を解消する。Bは切迫流産・早産で、8ヶ月間入院した。

高校をどうするかは、母親がBの気持ちを尊重してくれたこともあり中退した。中退・

出産後、高校の担任より連絡があり、通信制の学校を勧められたが、時間もなく実現していない。しかし、仕事（パート）も見つかり、「この道を選んで良かった」と思っている。当時、親から金銭的なサポートも受けていたため、子どもが8か月頃から働きはじめた。その後、子どもがてんかんであると判明し入退院を繰り返す日々が続いたため、仕事も長続きしていない。現在、保育所に入れずに母親が子どもの面倒をみてBが働いている。

③ Cさん—中絶経験後、21歳で出産

専門学生1年生の終わり（19歳の3月）に妊娠にする。パートナーの親は妊娠を喜んでくれたが、卒業を望んでいたCの親は反対した。Cにとって妊娠は予想外で、今は産めないと中絶を選択する。一方、パートナーは妊娠を大変喜んでいたので、中絶の意思を伝えた時はショックを受けたようだった。

2度目の妊娠は2年生の3月（20歳）だった。この時の妊娠も予想外で、働きだしたばかりのパートナーの収入で生活していけるか、さらに親からも子育ては大変だと言われ、不安を覚えた。しかし、パートナーはCの2度目の妊娠を「泣きながら喜び」、「頑張るから」と言ってくれ、出産を決意する。

パートナーとは、この妊娠中に同居を始め、二人の記念日の日に籍をいれた。パートナーが仕事で不在の時は、ほとんどCの実家で過ごしていたため、不安は感じなかった。専門学校は2年生になってからはほとんど通わず、妊娠の有無に関係なく、学校を辞めるつもりでいたため退学届を出した。パートナーはアルバイトからそのまま正社員となり、Cは専業主婦となった。

Cは出産し子育てとともに規則正しい生活となり、親も子どものことを可愛がり、友人も遊びにきたりと、子どもが産まれる以前と以後で、周囲との関係に変わりはない。

④ Dさん—18歳で出産、資格取得

Dは高校生3年生の冬に妊娠する。Dも同級生のパートナーも中絶する考えはなかった。二人はお互いの親、親しい友人にのみ妊娠を打ち明けるが、周囲は驚くものの出産を反対しなかった。打ち明けた友人も学校生活で「フォロー」してくれていた。ただ、妊娠すれば退学という噂があったのと、何よりも妊娠によりパートナーの就職が取消になることを恐れ、卒業まで妊娠を隠し続けた。

卒業後、パートナーは会社に就職し、本採用を待って会社に報告し、結婚した。出産後は、パートナーとともにDの実家でDの両親、兄とともに6人で暮らした。実家に甘えたくないと思い家賃もいれた。長男が6か月になると実家を出てアパートを借りて、新生活を始めた。パートナーの実家にも近く行き来をし、家族ぐるみで親交があった。

Dは長男が1歳半の頃から美容室で働きはじめ、間もなく資格取得のため通信の美容学校に通いだした（20歳）。その間に次男を妊娠・出産した（21歳）。次男を出産後すぐに、長男も4歳頃から保育所に預け、仕事の時間を増やしていった。次男は身体が弱く入院も多かったが、通信のスクーリングにもうまく通うことができ、美容師の試験に合格できた。当時を振り返り、保育所がなかったら「無理」「（保育所に入所することで）安心感もあるし」と話す。当時は、通信に通い、子どものお迎え、食事の用意、それから夜勉強という多忙な生活を送っていた。

⑤ Eさん—19歳で出産、離婚後再婚

高校3年生の冬休みに、妊娠する。1年半交際していたパートナーは、Eの妊娠をととても喜んだが、Eは周囲の助言で妊娠が不安になった。病院に行ったときに赤ちゃんがエコーで映し出されたときに出産を決意した。Eは、妊娠を隠してでも必ず高校を卒業しようと考えていた。卒業時点で妊娠5か月となったがなんとか卒業した。

高校卒業後の4月に、親が費用を出し、結婚した。その後は、パートナーの実家近くにアパートを借りて結婚生活を始めた。パートナーの母親はEの通院など協力的であった。18歳で第一子、20歳で第二子を出産した。徐々にパートナーは、職場のストレスから転職、その後単身赴任で家を空けることが多くなり、互いの気持ちもすれ違い溝ができたため、22歳で離婚した。両親より離婚を反対されたが、Eの気持ちは変わらなかった。

離婚後はそのまま実家で暮らし、アルバイト収入とその他手当を受給して生活した。36歳のとき、アルバイト先で知り合った人と再婚する。再婚後、Eの両親が転職し引っ越したため、実家でそのまま暮らすことになった。その後Eは再婚相手の子どもを出産し、第二子も妊娠している（インタビュー時点）。

(3) 妊娠への気づき

彼女たちが妊娠に気づいたのはいつか。多くは体調の変化、すなわち生理の遅れである。A・E・Dは、生理が遅れたことに異変を感じ、自分で購入した検査薬で調べると陽性反応となり気づく。

A: 実際さ、作ろうと思って作ったわけじゃないしさ。やってしまったのは自分なんだけど。だから、焦るじゃん、やっちまったみたい。とりあえず、どうしようってか、まあどうにもならないんだけど。

E: 確か生理が遅れて…それであの遅れることがなかったの。10日くらいなくて、自分の中でなんとなく「もしかしたら」っていうのがあって、調べてみたら、案の定っていう感じだったんです。

D: そう…生理がなくて、普通にね。なんかこないな〜って。私、周期が結構早かったから3週間に1回とかきてたから…あれ?って思って。

Dは両親に打ち明けてから病院を受診した。自宅付近の病院だと周囲に妊娠したことが発覚してしまうと考え、実母が昔行ったことのある他市の病院に連れて行ってもらった。医師から「妊娠してますね」と言われ、Dも「やっぱりそうなんだ」と思い、妊娠の事実を受け入れた。

Bは、妊娠に気付いたとき、嬉しさもあつたり、強く産みたいと思ったが、初めは不安の方が大きかった。

B: まず最初は不安だけでした。相手に妊娠したことを伝えるのが何よりも怖くて。ただ今までに体験したことがないくらい(子どもを)守りたいという感情がすぐ出てきました。嬉しさもちろん強かったですけど自分の若さで子どもを守っていけるかの不安の方が最初は大きかったです。好きな人の子だからこそ産みたい気持ちも強かったのですが、反面、大切な子だからこそ産みたい気持ちだけで決断するのは自分自身にもお腹の子にも良くないと思った。

Cは、中絶を経験している。

C: なんてゆうんだろ。その時はまさかっとかしか思わなかったし、なんか産めないって思

ったんですよね。(パートナーは)「ものすごく喜んでいたのでおろすと言った時はショックだったみたい」(中絶を経験した後は)絶対もう、おろしたくないと思いました。買い物とかで赤ちゃん見るのも辛かったです。

辛さを経験しながらもCは、いつもパートナーが傍にいて支えになってくれたため、乗り越えることができたという。再び妊娠が分かったのは専門学生2年生のとき(20歳)である。2人目の妊娠も「まさかっ」と驚いたという。

C: (妊娠を知ったときは)不安しかなかったかな。働きだしたばかりの旦那の収入でやっていたりかとか、親には「3時間おきの授乳とか大変だよ～」とか言われて全部が未知の世界だったから、色々悩んだ時期もありました。

(4) 妊娠に対する周囲の反応と出産への思い

妊娠の気づきは本人も予想外であったりするが、それゆえ周囲の反応が気になり、そのことで、さらに不安になったりする。ようやく打ち明けたときの周囲の反応はどうか。

Aの場合は、妊娠したことを、まずパートナーと親友に打ち明ける。その後に実母にも打ち明けるが、出産を反対され「産むなら出てけ」と言われた。一方、パートナーの両親は「産むなら協力する」と、Aの出産に対して協力する姿勢を示していた。

Bは、妊娠を実母に打ち明けると、「子どもを育てていくには覚悟が必要だ」と強く言われるものの反対は一切されなかった。「産む、産まないはBに任せる」「産むのなら出来ることは家族みんなでサポートしていくから」と言われた。Bにとって実母が何よりも心強い味方であり、その言葉に後押しされ出産する決意をした。パートナーからも「産んで欲しい」と言われ、パートナーは進学先も決まっていたが一緒に頑張っていく予定だった。しかしその後、パートナーの気持ちが揺らぐような態度がみられ、Bより交際を解消する。Bは「産む覚悟をしたとき、シングルになる覚悟」もしていたという。

Cのパートナーは妊娠を知り「泣きながら喜び」、「頑張るから」と言った。その「涙と笑顔」をみたら「がんばろっ」とCも思うことができ、不安が安心に変わったという。Cも「できた子は嬉しかったし、産みたいという気持ち」が強く「赤ちゃんに会いたかったかな～って気持ち」が強かったので出産を決意する。出産という判断は「簡単にはできない」ため金銭面や今後の生活についてパートナーと話し合った。

Dのパートナーは、妊娠を知ったときは驚き、保健の教科書を何度も見ていたりしたという。パートナーも中絶を望む考えはなく、その後2人でDの両親とパートナーの父親、親しい友人のみに妊娠したことを打ち明ける。

D: まず、(妊娠を知った両親や友人は)びっくりしたよね。びっくりして…う～ん。でもなんか、母もそうだし、友達もそうだけど、守ってくれたってゆうか、友達は、その友達一人しか知らないから、学校ですごい守ってくれたし、かばってくれたというか、フォローしてくれた。うん。そんな感じ。

Eが初めて相談したのは親しい友人だった。しかし、友人らは賛成とは言ってくれなかった。

E: 友達には…なんか「やめな」じゃないけど、「遊べなくなるし、おろしたほうがいいんじゃない」って感じに言われて反対されてたんだけど。で、また違う友達にも相談したら、やっぱり「先輩とかでも早く結婚して子ども産んだ人とかみんな…うん、遊べないとか、やっぱ若いから喧嘩とかして離婚しちゃったりとかしてる先輩とかも結構みてるから、やめたほうがいいよ」みたいな。「産まないほうがいいんじゃない」って言われてたんですけど。

しかし、Eのパートナーは、妊娠をととても喜んでいて、Eもパートナーが喜んでいてのを見て、出産する気でいたが、友人らの話を聞き「本当にやっていけるのかな」と不安になってきた。その不安な気持ちをパートナー伝えたら、それが原因で喧嘩にもなった。

病院受診後、妊娠をまず兄に相談すると、兄は「自分のしたい方でいいんじゃないの？産みたいんだったら産んでいいと思うよ」とEをサポートする態度であった。また、両親に何と言ったらいいか悩むEに対し、兄は「自分の親なんだからたぶんきつと味方になってくれるから」と言ってくれた。そして、Eはまず母親に妊娠を打ち明けた。

E:「お母さんに話あるんだよね」って言ったら、私があらたまって話あるって言ったことがなかったの、うちの母はなんかピンときたらしく、なかなか言えずにいたら「あんたまさか子どもできたわけじゃないでしょうね」みたいな感じで言われて…。

母親より「どうしたいの？」「反対したらどうするの？」と聞かれ、「反対されたら(家を出てく)と言った。母親もEの性格を踏まえて本当に家出するつもりだろうと思ったらしく、最終的には「お父さん反対してもお母さん面倒みてあげるから」とEの決意を受け入れてくれた。その後、父親に打ち明けると「自分の子であろうが、他人の子であろうがおろすことはよくないから、産みなさい」と出産を許してもらうことができた。

一方、パートナーの母親(母子家庭)はEの実家に訪れ、土下座をして謝ったという。Eは出産する意思を伝え、今後のことを話し合った。

(5) 中絶の迷いと出産の決意

周囲の反応で、それぞれ出産の気持ちが固まったり、中絶ということも浮かんだりするが、妊娠を気付いた時から揺らぎながらも出産を決めた心情が語られる。

Aは悩んだ末、中絶の費用のことより、産みたい気持ちの方が強かったため出産を決意する。言葉使いは乱暴であるが、産み育てる決意があったように思われる。

A:…なんていうか、結局…自分のやったことだし、人一人殺すよりいいだろうって。でも、随ろすのと産むのでかかるお金も違うし…とは思ったけど、やっぱり…できてしまったものは、自分で…育てようと思った。育てるってなったら、中途半端にはいかないし…。

Bは妊娠が原因で退学になると思うと、「自分のやりたかった事、友人関係などいろいろ考えると産まない選択も少しだけありました」と、中絶を考えたことがあったともいう。

B:ただ産婦人科で初めてエコーを見た時に産まない選択はすぐに消え去りました。

出産を迷ったEは、1歳年上のいとこ(女性)に相談し、いとこの勧めですぐに病院に行き、エコーをみた時点でおろせないと思ったという。

E:病院行って、やっぱりエコーで赤ちゃんみたら、もうこれはおろせないってなって、産む決心をしました。

BもEも実際に、目の前にある命(エコー)を見たときに、強い決意をしている。

(6) 学校との関係・対応・学業への思い

妊娠に気づいたとき、彼女らは学業の途中である高校生や専門学校生であった。妊娠がわかり、学業をどうするのか、学校側はどういう対応になるのかといった、結論をどのようにだしたのか。彼女らの語りから、「中退」と「卒業」という結果にわかるが、その結果を

選択するまでにはそれぞれの葛藤がみられる。

① 高校中退

A はもともと大学進学する費用もなく学力不足のために、卒業後は就職する予定だった。妊娠が発覚し実母より子育てと学業の両立は「そんな上手いこといくわけないでしょ」と言われ、A もその言葉に納得し、進学するわけでもないので高校中退を選択した。

高校の担任の先生に妊娠したことを打ち明けると「(高校を) 辞めるな」「もうちょっと頑張れば」とA を引き留める言葉をかけられた。A は考えが変わらず、高校卒業まであと半年を残して中退した。

A: 担任と話したんだけど、1年のおかげからその人好きじゃなかったから、なんとも思わなかったんだよね。だから、なにやってんだこいつみたいな感じでずっと聞いてたから、あんまりそういう感じはなかった。けど、この…自分のメンツ…あれ…で言ってんだろなと思ってた。(略) 今さすがに高校卒業しておけばよかったなって思うけど、まあ、別にそれは過ぎてしまったことだから、しょうがないでしょっていう感じ。

B は、妊娠すると当然退学だと思っていた。学校に通わせてもらっていた親に対して、「申し訳ない」と思った。しかし、親から「命を大切に考えられるのはいい事だし、B が決めたことなら何も思わないよ」と言われ、高校中退を決断する。親が肯定してくれたことが支えとなり現在も中退したことに関して一切の後悔はないと話す。

高校を中退し、出産後しばらく経ったとき、高校の担任の先生より連絡があった。先生は「とてもいい方」で高卒となるよう通信制の学校について情報をくれた。

B: 元担任から連絡があり、「今後そのままどこかで働くのか?」とか聞かれて「そのつもりです」と答えたら、(先生が)「高校卒業したいのなら通信制の道もあるんだよ」と言ってくれました。高2の途中までいたことを学校側で書類を書いてくれると残りの一年ちょいで通信制で学べば卒業したことになるからと細かく教えてくれました。ただ、早く仕事をしたい気持ちもあって通信制も考えましたが結局止めました。

② 専門学校中退

C は2年生になってからほとんど学校に通っていなかったため、学校を辞めるという考えは2年の秋くらいからあった。もともと専門学校には強い修学の意味はなく、「ただ、資格がとれるって聞いたので行っただけ」だったとのことであった。そもそも、学校や教員との折り合いが悪く、妊娠の有無に関係なく、学校を辞めるつもりでいた。教員の中には「女で気の強い方で、がんこでなんでも自分が正しいみたいな言い方」をする人がおり、「毎回毎回ムカついて反発」「ぶつかり合いまくり」であったと語る。そういった経緯から、妊娠に関しての相談は一切せず、退学届を出した。

C: 色々積み重ねがありました。先生とは笑いあったりしたことはなかったです。

③ 卒業—妊娠を隠しながら—

D は妊娠したことが学校に知られると退学になると思っていた。同時に、出産後、自分たちで生計を立てなければならぬと考えていたDにとって、Dの退学でパートナーの内定に悪影響がでることをいちばん恐れていた。パートナーの就職は絶対的なことであり、また、ここまで続けた高校を退学したくなかった。Dとパートナーは、妊娠を隠すことばかり考えていた

D: やっぱり退学が一番怖くて。就職…ね、旦那さんの就職のことがやっぱり大事じゃない？将来子どものためにもそうだけど、うん。それに影響がないようになってことで、あんまり人にも言えなかったし。卒業して、ちゃんと働きだしてれば、まだ、うん、大丈夫かな～って感じで。

D 自身の進路については、「特に夢とかもなく、やりたいこととかなくて」、「ほんとに結婚がしたかったんだ」と結婚願望が強かったと話す。学校との進路相談のときは何となく言葉を濁しその場をしのいでいた。

D: 就職はそのときは決まっていなくて、先生は焦ってたけど。なんとなく(言葉を)濁して、まあ、「働くから、働くよ」、「進学はしない」って、就職活動してるふう？って感じで。

また、担任の教師は男性で、Dは「ちょっと変わり者」だと思っていた。妊娠について打ち明けたとしても恐らく理解されないだろうと思い、学校側に打ち明けようとは思わなかったと話す。

D: ただ、そういうこと(妊娠)話しても、たぶん理解できないだろうなみたいな先生だったから…っていうのもあるし、まず、学校に言って、「そっか」って、「じゃあ産め」って言ってくれるとは思えなかったから、そんなに、ね。たぶん、先生に話そうとは思わなかった。

卒業までDは、学校に妊娠を隠したまま残りの学生生活を送った。体育の授業も出席していたが、バレーのような激しい競技は「体調悪いとか言って休んだり」して、なんとかやり過ごしていた。卒業までにはつわりもあったため、学校に通うということや、妊娠中に自動車学校に通っていたことが大変であったと話す。卒業時は「お腹もぎりぎり大きくなるかならないか」であった。後になって周囲の友人から「おなかででた」と言われるが、当時は誰からも何も言われなかった。高校3年の最後の1か月程は学校に行かなくてもよかったため「大丈夫だったかもしれない」と語る。その後、Dとパートナーは無事に高校を卒業する。

Eの場合、高校1年時に高校を辞めたくて家出をしたことがあった。その際、父親から「高校だけはちゃんと卒業しなさい」と言われ、約束したため、妊娠を隠してでも高校を卒業しようと考えていた。当時Eの高校では、妊娠が「先生にばれたら退学になる」ということが生徒間の噂として流れており、Eも、「妊娠=退学」が学校全体の「ルール」として決められていると思っていた。そのため、親しい友人数人にのみ妊娠を打ち明け、学校側に知られないように隠していた。

E: 学校の校則っていうか学校のルールとして、ばれちゃうと退学になっちゃうんで。仲いい子数人にだけは言って、他(の人に)はただ太ただけって言って隠して。先生にばれたら退学になるっていう噂を聞いて「絶対ばれないようにしよう」って。

同じ高校には、妊娠した生徒が他にもおり、体育の授業や運動をしたため流産したという話を耳にしていた。幸いなことにEの場合、残りの授業日数も少なく体育の授業もなかったこと、妊娠による体調の負担(嘔吐など)がなかったため、通学には支障がなかった。卒業時点で妊娠5か月となり、制服のサイズもぎりぎりであったと話す。自分の卒業後の進路については、進学は考えておらず、「何かこれをやりたいとか、そうゆうのは何もなかったんで」就職活動も全くしていなかったという。

(7) 妊娠中

妊娠中は不安な時期でありながらも、家族や母親の協力があれば、さほど不安なく生活できている様子が語られた。

E:自分の実家には、たぶん一番…母親にはすごいお世話になっていて。まあ旦那も働いてたので、とくに…。周りにちっちゃい子もいなかったんで、そのなんか出産にあたって何を準備するとか、全くわからなくて、そういうのを全部母が一から用意しておいてくれて、っていう感じかな。妊娠中はさほどなんか不安とかなかったような気がしますね。

表2：周囲の反応

対象者(年齢)		A (22歳)	B (22歳)	C (22歳)	D (31歳)	E (38歳)
パートナー		賛成	賛成	喜ぶ	反対はない	喜んだ
友人		—	—	—	守ってくれた	どちらかというと反対
家族	自分	反対	反対はされない 家族でサポート	—	反対はない	母:支持 父:支持 兄 支持する
	パートナー	協力する	—	—	反対はない	
学校・教員		引き留められる も中退	自分で中退を 決意 中退後連絡あり	相談せず中 退	相談せず 隠す	相談せず 隠す

4. 若年妊娠・出産における困難と葛藤

(1) 妊娠・出産と学業

学校では妊娠し出産を選択する場合は即退学という規則は特にはない。しかし、多くの場合、学校や教師に妊娠していたことがわかると学校を退学させられるという暗黙の了解が浸透している(B・D・E)。さらに自身の妊娠が学校に発覚することにより、パートナーの進学や就職にまで影響が及ぶとも考え、それを恐れていた。「妊娠」ということに対して、本人も含めて社会が、特殊な出来事であるという認識があることがわかる。

妊娠の事実を学校や周囲に隠すことで妊娠と学業を継続させた人もいたが(D・E)、卒業までの短期間であったため、なんとか卒業が実現できたに過ぎない。一方で、妊娠・出産と学業継続の両立が困難であると考え、出産を決意し高校を自主退学している(A・B)

実際、5人の中にはさらに、「学業継続の意思(A・B・C)」や「若年出産・子育てに関する将来への不安(E)」から、中絶を考えたことがある者が4人(A・B・C・E)、そのうち「学業継続の意思」により中絶を経験したことがある者が1人いた(C)。

「妊娠するのであれば卒業してから、子どもを産むのなら結婚して、妊娠」といった流れを一般的な社会規範とし、若年妊娠者自身もそれを自覚し「学業を続けるとすれば中絶、妊娠を継続すれば退学というように選択が限られている」との指摘があるが(町浦,2000)、本調査においても妊娠と学業の継続の両立が困難であると考え、若年妊娠者の選択・行動が限定されている点において同様の困難さがみられた。

現実的には、休学・復学あるいは通信制や単位制といった多様な単位履修方法の普及など、若年妊娠者のニーズに対応するように教育環境が変化し、現場の教員も転校措置を用いながら、肯定的に彼女らを支援している事例も多い(小川等,2007)。インタビューからも、Aの担任教師は退学を引き留め、Bの担任教師も退学後に通信教育の学校について情報提供したりと、学校側も退学ではない方法をできるかぎり考えている姿勢がみられた。しかし、それほど教育機関側に若年妊娠者の受け入れる体制があったとしても、教師に対して信頼感

がない、あるいは反発している生徒の場合、教師に妊娠を相談するどころか打ち明けることも困難さがあるといえる。高校在学中に「妊娠したとしても学校を休学し、復帰できるような制度があればよかった」(E)と語るように、そうした助言の一言があれば、変わっていた可能性は大きいだろう。

担任教師に話していないうちの2人は、そもそも全ての教師に妊娠を隠していた(D・E)。そのような状況では、体育の授業等で母体に負荷のかかる運動をしてしまう恐れや、学校で妊娠による体調不良や母体及び胎児の緊急時に対応することが困難となる。つまり、十分な産科指導を受けられず、流産や早産といった医学的リスクが高くなる。インタビューでは、体育の授業がそれほどなかったことや(E)、本人が激しい運動を回避し授業を休んでいたため、結果的に無事出産することができている。しかし、妊娠・分娩に関する知識不足が指摘されている若年妊娠者に、「妊娠中に〇〇をすることは危険である」といった正しい判断をすることは難しいのではないだろうか。それらの知識を身に着けていない者にとっては、教師に妊娠を打ち明けることができないという社会的リスクが十分な産科指導を受けられないというリスクを招き、結果的に流産や早産といった医学的リスクに繋がる恐れがあるだろう。

さらに、教師に妊娠の事実を隠していた2人が高校を卒業し、妊娠したことを話した2人が自主退学を選択している(A・B)。退学を選択し高校中退という学歴になったことについてAは、高校を退学したことへの後悔と諦めがみられた。Bは、現在の仕事に満足し「この道(退学)を選んで良かった」と話す一方で、教師より紹介された通信制高校での卒業と高校在学中に目指していた専門学校で取得できる資格の通信教育を考え、「仕事に家事に育児+勉強は時間が足りない」ということで断念していた。現在の生活に満足しているとはいえ、学業の断念は未練があるようでもある。

このように、教師と話し合い妊娠継続と引き換えに自主退学を選択した2人には、退学の後悔や通信制教育などで学びなおすことの諦めと困難さがあることが明らかになった。妊娠は隠さないといけないことか。一般的に出産はおめでたいことなのに、若年者に関しては「腫物にさわるように」扱われている。しかし、それは周囲の反応によっても大きく変わる。

(2) 周囲の反応の違いによる影響

5人とも妊娠には早い段階(妊娠満22週未満：母体保護法に基づく中絶可能な時期)で気づいていた。しかし、妊娠自体は予想外のことであり、それぞれ焦りや驚き、不安を抱えていた。彼女たちの妊娠初期の主な相談相手は家族や親戚、パートナー、親しい友人といったインフォーマルな人に限定されていた。

周囲に妊娠したことを相談したときの反応は、その後の妊娠生活や育児も影響をもたらす。

肯定的な反応をされたケースは、妊娠を喜ぶパートナーや家族でサポートしていく姿勢などに励まされ、その存在に支えられていた。また家族が支持的である場合は、精神面だけでなく、具体的に経済面や子育ての協力を得られ、インフォーマルなサポート体制が安定している実態があった。

一方、家族から妊娠・出産に関して否定的な反応をされたケース(A・C)はどうだった

か。妊娠継続と学業継続の両立は不可能という理由で出産を反対された。その反対の助言は、近親者であることから強く影響を与え、本人が納得するように導いている。Aは高校を中退し、Cは中絶を選択するが、その選択に後悔がみられた。さらに、友人やパートナーは妊娠者同様に若年で妊娠・出産にまつわる知識不足が考えられること、さらに家族の場合、わが子(若年者)の妊娠・出産は自身の生活と密接した問題であり、若年者同様に世間体や一般的な社会規範などの影響を受けること、自分の周囲の教育体制や家庭環境の範囲での情報で判断すること、近年の妊娠・出産を取り巻く制度や支援や子育て方法などについて十分に知識を身に付けていない場合がある。実際、A・Cの家族は学業と妊娠継続の両立は不可能であると自分自身の「決めつけ」があった。若年者が妊娠初期でインフォーマルな人の意見を参考にして自己決定を行う場合には、正しい情報や知識の下で判断ができていない危険性が伴うという実態がみられた。

(3) 若年妊娠者のライフプランの困難さ

ここで、若年妊娠者のライフプランの視点からみてみたい。ライフプランとは、人生設計のことである。若年者の場合、妊娠・出産・子育てを自分のライフプランに位置づける前に「妊娠したから結婚」という状況に追い込まれることが多々あるが(森田,2012)、さらに同様の研究ではきょうだいのなかで父親の違う子どもの妊娠や、未婚のまま出産に至ることが多いこと、浮気やDVに発展、家庭不和が原因で別居や離婚に至る事例も報告されており、若年者を取り巻く環境の変化は激しく、ライフプランを位置づけること自体に困難さがある。

調査からでも妊娠判明後に結婚した人が4人(A・C・D・E)、1人(B)が判明後にパートナーとの交際を解消し未婚となっている。結婚が家族のあり方のすべてではないが、結婚した4人のうち3人が離婚に至っている。さらに、Cは一度目の妊娠で中絶を選択し、1年後に再び妊娠・出産を経験している。このように若年妊娠者は非常に短い期間で妊娠、そして中絶や出産、結婚・離婚を経験していることがわかっている。つまるところ、将来の生活や就職、子育てなどのライフプランを立てるといよりは、困難さを抱えつつその都度状況に応じて生活しているという実態が明らかになった。

また、若年者がライフプランを視野に入れずに様々な選択を行える背景には、「家族サポート体制」の存在が大きいと考えられる。それらのインフォーマルな支援がなければ離婚や未婚という選択をした時点で、若年者とその子どもにはさらに生活に経済的な困難さが生じるといえるだろう。

確かに妊娠は予期せぬ事態であったかもしれない。だが、若年であるからといって、彼女たちは決して、自分や周囲のライフスタイルを壊そうとして行動しているわけではない。それぞれ世間体や社会規範などを意識し、社会的な偏見を受けながらも「母親として認められるように、自立した生活が送れるように」と日々懸命に子育てや仕事に取り組んでいた。しかし、妊娠期から出産に至るまで家族の支援のもとで成り立っているもの事実であり、若年妊娠者のライフプランの位置づけには家族の存在とサポートが不可欠であるという実態が明らかになった。

謝辞；インタビュー調査にご協力くださいました皆様に心より感謝申し上げます。

参考・引用文献

- 1) 大川聡子 (2008) 「親役割への支援-10代で出産した母親の事例を通して(周産期医療をとりまく環境とメンタルヘルス)」, 周産期医学 38(5), pp.529-533.
- 2) ——— (2010) 「10代の母親が社会化する過程において、顕在化する支援ニーズ」, 立命館産業社会論集, 46(2), pp.67-88.
- 3) 小笠原敏浩・利部正裕 (2003) 「岩手県における10代の妊娠と人工妊娠中絶の実態調査」 岩手県立病院医学会雑誌 43 (2) , pp.133-139.
- 4) 小川久貴子・安達久美子・恵美須文枝 (2006) 「10代妊婦に関する研究内容の分析と今後の課題-1990年から2005年の国内文献の調査から-」 日本助産学会誌 20(2), pp.50-63.
- 5) ——— (2007) 「10代女性が妊娠を継続するに至った体験」 日本助産学会誌 21(1), pp.17-29.
- 6) 奥田直貴・中井章人 (2008) 「若年妊娠のリスクとメリット(特集 それぞれの選択 リスクとメリット 高年妊娠と若年妊娠)」, ペリネイタル・ケア 27(7), pp.669-672.
- 7) 片桐清一 (2001) 「若年妊娠の社会的背景とその支援(特集周産期の社会的リスクとその支援)」 東京医学社, 周産期医学 31 (6) , pp.745-748.
- 8) 月刊地域保健編集部・文 (2015) 「若年妊娠の医学的、社会的リスク (特集 妊娠、出産、子育ての切れ目ない支援の中で10代の母を支える)」, 月刊地域保健 46(9), pp.16-20.
- 9) 種部恭子 (2016) 「性教育でできること(平成27年度家族計画・母体保護法指導者講習会)-(シンポジウム 若年妊娠について)」, 日本医師会雑誌 145(2), pp.307-309.
- 10) 東京都社会福祉協議会 (2003) 『10代で出産した母親の子育てと子育て支援に関する調査』
- 11) 野末悦子 (2000) 「未婚妊婦に対する周産期母子保健指導」, 周産期医学 30(2), pp.163-168.
- 12) 林謙治 (1987) 『10代の妊娠』 自由企画・出版
- 13) 森田明美 (2004) 「10代で出産した母親たちの子育て--実態調査から学ぶこと」, 月刊福祉 87(5), pp.42-45.
- 14) ——— (2012) 「10代母親の現状と支援の課題: 共感的な支援を地域につくりだす」, 月刊福祉 95(13), pp.40-45.
- 15) リウ・真田知子 (1998) 「若年出産者への保健指導(助産婦のための退院指導マニュアル)-(課題をもつケースの退院指導-産褥回復への母体の課題)」, ペリネイタル・ケア 17, pp.197-208.

¹ さらに低年齢の出生数は母親の年齢階級別(5歳階級)にみると、14歳以下の出生数は、2002年の2万1,401人中52人をピークとし、その後徐々に減少し、2014年には1万3,011人中43人となる。(厚生労働省『平成12年～平成26年人口動態統計(確定数)の概況』『平成27年人口動態統計月報年計(概数)の概況-母の年齢・出生順位別にみた出生数の年次推移』より算出)。

² 定月(2009)は、この現象について「若年を取り巻く環境が改善しているわけではない」とし、若年妊娠・出産の急増に対する驚異が地方行政における支援を促進したことが効果をもたらしているとしている。

³ 中絶事例は「妊娠が継続されていた場合、生児が得られる可能性が高い妊娠である」とみなされる、「10代女性の中絶件数と10代女性の出生数の和」が実質的なその年の10代妊娠総数と仮定した定月(2009)の算定法と大川(2015b)の計算方法をもとに「10代の出生数から10代妊娠総数(仮定)を除いたもの」を出産割合として、厚生労働省の統計より算出した。

⁴ 厚生労働省『出生に関する統計の概況における人口動態統計特殊報告』によれば、1980年47.4%、2000年81.7%、2009年81.5%と30年で30%以上上昇している。全体平均が25.3%であることから10代の比率が非常に高い(森田,2012;佐藤,2016)。

⁵ 対象者の選定は筆者(石田)との機縁法により選定した。

⁶ インタビューの所要時間は約60分～180分であった。また、インタビュー内容を録音・記録を行って良いかを確認、承諾の上でボイスレコーダーに録音し、その内容を逐語録に起こした。インタビューの内容については、調査対象者の許可が得られた場合に録音し、逐語録に起こす際は個人名や地名などが特定できないよう配慮した。また、インタビューの実施日、実施場所・時間についても、調査対象者と相談の上、居住地やその付近とし、調査対象者の負担にならないよう配慮した。

⁷ 「LINE」による「インタビュー」は、調査方法にさらなる精査や検討が必要と思われる。しかし、調査対象者から、普段使い慣れているSNSのほうが対面の緊張がなく、まとまった時間が取れなくても、とぎれとぎれでも気持ちを落ち着かせてゆっくり回答することができるということで、LINEなら可能という要望があった。そのため、今回この方式を採用するにあたり、次のように慎重に対応した。やり取りの前に十分に調査の意図や方法を確認した。1人につき3週間程度で、調査対象者の話の内容を要

約・確認しながら実施した。「LINE」でのやり取りでは文章中における誤字については訂正を加えるが、言葉や表現はそのまま記述した。しかし、絵文字等の記号に関しては省略した。あらかじめ子育てや仕事の時間の都合の良いときに返信するという事で、調査対象者の負担とならないよう配慮した。また、文章でのやり取りとなるため、その都度感情の反映や繰り返しを行い内容の確認をしつつインタビュー（メール）を実施した。また筆者の伝えたい言葉が冷たい印象にならないよう配慮して行った。